

# イエスとは何者か

——ルカ9:18-36の釈義的考察——

嶺 重 淑

## 序

新約聖書の福音書においては主としてイエスの言葉と行為について記されており、イエスがその中心人物であることは言うまでもない。その一方で、福音書はイエスの生涯全体を書き記そうとした伝記ではなく、イエスの幼少年期や青年期についてはほとんど記されていない<sup>1</sup>。事実、福音書の記述はイエスの宣教活動に焦点が当てられており、それらの記述を通して、イエスの本質、すなわち「イエスとは何者か」について語ろうとしている。

もっとも、新約聖書に含まれる四つの福音書の記述内容は同一ではなく、それぞれ異なるイエス像が描かれている。ルカ福音書に関して言えば、マルコとは異なり、冒頭にイエスの誕生物語、末尾に復活物語を含んでおり（マタイも同様）、その意味でも、その生涯全体を視野において宣教者イエスを描こうとしている。また、イエスの「神の子」性については、すでに冒頭の誕生物語において表明されており、これに続くガリラヤ宣教の記述において、ルカは折に触れて「イエスとは何者か」という問いに言及しているが（5:21; 7:49; 8:25; 9:9）、この問いがライトモチーフとなってこの箇所全体を貫いており、それがペトロの信仰告白の記述（9:18-22）及びイエスの変貌の記述（9:28-36）において一つの頂点に達することになる。

<sup>1</sup> マタイ、ルカ両福音書冒頭のイエスの誕生物語を別とすると、イエスの12歳のときのエピソードについて記すルカ2:41-52が唯一の例外である。

本稿では以上のことを念頭におきつつ、ルカ9:18-36のテキストに焦点を当て、ルカ福音書の前半部におけるイエス像の特質を明らかにしていきたい。

## 1. ルカ福音書前半部におけるイエスの本性に関わる証言

まず、ペトロの信仰告白に至るまでのルカ福音書におけるイエスの本性に関わる証言について検討しておきたい。冒頭の誕生物語（1:5-2:21）においては、全体として洗礼者ヨハネとイエスの誕生の出来事が交互に折り重なるように叙述され、ヨハネに対するイエスの優位性が示されている。この箇所において最初にイエスの本性について言及されるのは、マリアに対する天使ガブリエルのイエスの誕生告知においてであり、そこで幼子イエスは、将来「大いなる者」となり、「至高者の子」、「聖なる者」、「神の子」と称せられ、父祖ダビデの王座が与えられ、永遠にヤコブの家を王として支配すると予告される（1:32f.35）。また、ヨハネを身ごもったエリサベトは聖霊に満たされて、出産前のマリアを「私の主のお母様」と表現することにより、生まれて来るイエスを「主」と同定しており（1:43）、彼女の夫ザカリアも聖霊に満たされて賛歌を唱えるが、同様にイエスを「主」と見なしており（1:75）、さらに天使も、イエスの誕生を羊飼いたちに告知する際、イエスを「救い主」、「主なるキリスト」と表現している（2:11）。また、イエスの洗礼の記事では、「私の愛する子、私の心に適う者」（3:22）という声が天から起こり、荒野での誘惑の記事においては、悪魔はイエスが「神の子」であることを前提に誘惑の言葉を投げかけており、両者に挟まれたイエスの系図においてもイエスが神の子孫であることが暗示されている。さらに、カファルナウムでの宣教の記述においては、悪霊がイエスに対して「神の聖者だ」（4:34）と叫び、「お前は神の子だ」（4:41）と語っている。

また、中風患者の癒しの記事では、律法学者やファリサイ派が、罪の赦しを宣言したイエスに対して「神を冒瀆するこの男は何者だ」（5:21）と問いかけているが、彼らはもちろんイエスの本性を見極めることができないでいる。続いて、やもめの息子の蘇生の記述においては、蘇生の奇跡を目の当たりにした人々が「大

預言者が現れた」と叫び、また、この直後の洗礼者ヨハネに関する記述においては、ヨハネの弟子たちが、「来たるべき方はあなたですか」(7:20)とイエスに問いかけるが、彼らもイエスを理解するには至らなかった。さらに、罪深い女性の赦しの段落においては、その女性の罪を赦したイエスに対して、人々が「罪さえ赦すこの人は、いったい何者だ」(7:49)と問い、また、イエスが嵐を静めたあと、弟子たちも「いったいこの方は何者だろう」(8:25)という問いを発するが、いずれにしてもイエスを十分に理解するには至っていない。その直後の悪霊に取りつかれたゲラサ人の癒しの記述においては、イエスが「至高の神の子」と表現されているが(8:28)、ここでもイエスの神の子性を証言しているのは悪霊である。そして、9:7-9のヘロデのエピソードにおいては、人々がイエスを「甦ったヨハネ」、「エリヤの再来」、「復活した昔のある預言者」と考えていたことが示されているが、それらのどの理解にも組まないヘロデは、「この男は何者だ」という問いを発しており、このようにして、イエスの本質をめぐる問いへの関心が徐々に高められていき、9:18以下の箇所でも頂点を迎えることになる。このように、イエスはすでにここまでの箇所でも繰り返し「神の子」と証言されているが、注目すべきことに、そのように証言しているのは、天使、聖霊に満たされた人物、悪魔、悪霊等の特殊な存在に限られている。

そこで、これらの点を踏まえ、以下の部分ではルカ9:18-36のテキストの積義的検討を通して、そこでイエスがどのように理解されているのかを明らかにしていきたい。

## 2. テキストの検討

### 2.1. 私訳

9:18 さて、彼（イエス）が一人で祈っていたとき、弟子たちは彼と共にいた。そこで彼は彼らに、「群衆は私を誰だと言っているか」と尋ねて言った。19 そこで彼らは答えて言った。『洗礼者ヨハネだ』[と言っており]、ほかに『エリヤだ』[と言う人も]、また『昔のある預言者が復活した』[と言っている人もいます]。』

20 そこで彼は彼らに言った。「それでは、あなたたち自身は私を誰だと言うのか」。するとペトロが答えて「神のキリスト〔です〕」と言った。

21 しかし彼は彼らを厳しく戒め、このことを誰にも話さないように命じて、22 「人の子は多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥され、殺され、三日目に甦らされることになっている」と言った。

23 そして彼（イエス）は皆に言った。「もし誰かが、私の後からついて来たいと思うなら、自分自身を否み、日々自分の十字架を背負い、私に従って来なさい。24 というのも、自分の命を救おうとする者はそれを失うが、私のために自分の命を失う者はそれを救うのである。25 というのも、人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失ったり損なったりしては、何の益になろうか。26 というのも、私と私の言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちの栄光を伴って来るときにその者を恥じるのである。27 しかし私は確かにあなたたちに言うが、ここに立っている人々の中には、神の国を見るまで決して死を味わわない者がいる」。

28 さて、これらの話をしてから8日ほど経ったとき、彼（イエス）はペトロとヨハネとヤコブを連れて祈るために山に登った。29 すると彼が祈っているうちに彼の顔の様が変わり、そして彼の服は真っ白に輝いた。30 すると見よ、二人の男が彼と語り合っていたが、彼らはモーセとエリヤであった。31 彼らは栄光のうちに現れ、エルサレムで成就しようとしている彼の旅立ちについて話していた。32 一方で、ペトロ及び彼と一緒にいた者はすっかり眠り込んでいたが、目を覚まして、彼（イエス）の栄光と彼と一緒に立っている二人の男を見た。33 そして彼ら（二人の男）が彼から離れて行く際、ペトロがイエスに言った。「先生、私たちがここにいるのはすばらしいことです。そこで幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために」。ペトロは、自分が何を言っているのか、分からなかったのである。34 しかし彼がこのように語っているとき、雲が現れて彼ら（三人の天的存在）を覆った。そして彼らが雲の中に入って行ったとき、彼ら（弟子たち）は恐れた。35 すると、雲の中から「これは私の子、選ばれた者。これに聞け」という声が起こった。

36 そしてその声が起こったとき、イエスだけが〔そこに〕いることがわかった。そこで彼ら（弟子たち）自身は沈黙して、その当時は自分たちが見たことを誰にも何も知らせなかった。

## 2.2. テキストの分析

### 2.2.1. 文脈と構成

直前の箇所ではイエスによる供食の奇跡について語られることにより、イエスの力ある業が示されるが、それに続くペトロのキリスト告白と第一回受難予告（ルカ9:18-22）の段落ではイエスの本質をめぐる問いに焦点が当てられる。ルカは8:4から前段の供食物語まで総じてマルコの記述に従ってきたが、その直後のマルコ6:45-8:26に対応する箇所はルカには見られず、編集的に削除されたと考えられる<sup>2</sup>。この「大削除」の結果、ルカにおいてはペトロのキリスト告白が5000人の供食物語の直後に位置づけられ、ペトロの告白はその直前のヘロデの問いへの返答として機能することになる。マルコにおいては、その福音書の最初の頂点をなすペトロのキリスト告白及びイエスの沈黙命令（マコ8:27-30）とそれに続くイエスの受難予告（同8:31-33）は、後者がκαὶ ἤρξατο διδάσκειν αὐτούς（それから彼（イエス）は、……彼らに教え始めた）という表現によって導入されていることから明確に区分されているが、ルカにおいては沈黙命令と受難予告が一文で構成されており（21f節）、両者は緊密に結びついている。

ペトロのキリスト告白及び第一回受難予告（18-22節）の直後には、イエスへの信従を主題とする段落（23-27節）が続いているが、事実、イエスがキリストであることと弟子としてイエスに従うことは密接に関連している。また、受難予告直後のペトロの反論とイエスの叱責（マコ8:32b-33参照）を欠くルカにおいては、この段落はマルコ以上に緊密にイエスの受難予告と結びついており、イエスの受難と弟子の（受難の）信従との関係がより一層明確になっている。

<sup>2</sup> ルカはテキストの重複を避けようとしてこの箇所を削除したのではなく、むしろ、ゲラサ地方での悪霊追放の記事（8:26-39）を除いてイエスの活動をユダヤ地域に限定しようとしたのであろう。

この段落は冒頭の序（23節a）とイエスへの信徒を主題とする五つの言葉（23b-27節）から構成されているが、最初の十字架の信徒の言葉（23節b）がこの段落全体の標題として機能しているのに対し、γάρを伴う後続の三つの言葉（24,25,26節）はこの原則的要求を根拠づけている。最後の言葉（27節）については、マルコの並行箇所では新たな段落を導入する表現（καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς …）によって始められているのに対し（マコ9:1）、この移行句が省略されているルカの文脈においては、先行する箇所とより緊密に結合し、段落全体を締めくくる機能を果たしている。

弟子たちの信徒について記された直後にはイエスが変貌する黙示的エピソード（9:28-36）が続き、このエピソードにおいて再びイエスの本質に焦点が当てられ、イエスが神の子として表明されると共に、その神の子イエスへの服従が命じられる。なお、「これらの話をしてから」という冒頭句は、この段落をマルコ以上に緊密に直前の段落に結びつけているが、「栄光」への言及（31,32節→9:26）やイエスの旅立ちに関する記述（31節→9:22）もこの箇所を直前の段落に結びつけている。この段落の各構成単位はἐγένετο ὁέ（28節）及びκαὶ ἐγένετο（29, 33, 35節）という表現によって導入されているが、なかでも29節と33節は〔καὶ ἐγένετο ἐν τῷ + 不定詞句〕という同一表現によって始められていることから、29節以下は前半部（29-32節）と後半部（33-36節）に区分することも可能であろう。このルカ9:18-36全体は以下のような構成になっている。

①ペトロのキリスト告白と第一回受難予告（9:18-22）

- (1) 序：状況設定（18節a）
- (2) ペトロのキリスト告白（18b-20節）
  - (a) 自らの本質をめぐるイエスの問いと弟子たちの答え（18b-19節）
  - (b) さらなるイエスの問いとペトロの答え（20節）
- (3) イエスの受難・復活予告（21-22節）
  - (a) 弟子たちへの沈黙命令（21節）
  - (b) イエスの受難・復活予告（22節）

②信徒の道（9:23-27）

- (1) 序：導入句（23節a）
  - (2) 信従に際する原則的要求（23節b）
  - (3) 原則的要求を根拠づける三つの言葉（24-26節）
    - (a) 第一の根拠：命の救出と喪失（24節）
    - (b) 第二の根拠：全世界の獲得と自分自身の喪失（25節）
    - (c) 第三の根拠：イエスとその言葉を恥じる者（26節）
  - (4) 結び：神の国の間近な到来（27節）
- ③イエスの変貌（9:28-36）
- (1) 序：状況設定（28節）
  - (2) イエスの変貌とモーセとエリヤの出現（29-32節）
    - (a) イエスの変貌（29節）
    - (b) 三人の天的存在の対話（30-31節）
    - (c) 弟子たちの目覚めと目撃（32節）
  - (3) ペトロの提案と雲の出現（33-34節）
  - (4) 天からの声と弟子たちの反応（35-36節）

## 2.2.2. 資料と編集

ルカ9:18-22は全体としてマルコ8:27-33及びマタイ16:13-23に並行している。末尾の22節（マコ8:31//マタ16:21並行）については、ルカとマタイとの間に若干の弱小一致も確認されるが<sup>3</sup>、それらはマルコの改訂版に由来すると考えられる。その一方で、[καὶ ἐγένετο ἐν τῷ + 不定詞句] というルカ的表現<sup>4</sup>で始まる導入部分（18節a）はルカの編集句であろう（マコ6:46参照）。また、フィリポ・カイザリアという地名を含むマルコの状況設定部（マコ8:28a）やペトロの否定的発言とイエスの叱責（同8:32b-33）はルカには欠けているが、前者についてはフィリポ・

<sup>3</sup> マルコの ὑπό に対する ἀπό やマルコの μετὰ τρεῖς ἡμέρας ἀναστῆναι に対する τῆ τρίτη ἡμέρα ἐγερθῆναι 等。

<sup>4</sup> J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, pp. 25-29参照。

カイザリアがユダヤ領域外に位置するという理由から、後者については後続の教会指導者としてのペトロのイメージと矛盾するために削除されたのであろう<sup>5</sup>。

続くルカ9:23-27は全体としてマルコ8:34<sup>9</sup>:9:1及びマタイ16:24-28に並行しているが、ルカはここでも基本的にマルコのテキストに従っている。個々の言葉についてはQ資料にも並行（関連）記事が見られるが（23節b：14:27//マタ10:38、24節：17:33//マタ10:39//ヨハ12:25、26節：12:8f//マタ10:32f）、それぞれ異なる文脈に置かれていることから、元来は独立していた個々の言葉がマルコによってまとめられたのであろう<sup>6</sup>。さらにルカとマタイの間には、マルコ8:35の ἀπολέσει (ἀπόλλυμι [失う] の接続法未来三人称単数) に対する ἀπολέση (同接続法アオリスト三人称単数 [24節/マタ16:25]) の他、幾つかのマルコの表現が共通して欠けている等、弱小一致が見られるが、それらすべてが両福音書記者の独立した編集作業によるとは考えにくく、むしろ両者がマルコの改訂版を用いたことに起因するのであろう。その一方で、ἐλεγεν δέ (新約用例11回中ルカに9回使用)、[言述の動詞 + πρός + 対象を示す対格] (新約用例169回中ルカ文書に149回使用) 等のルカの表現を含む導入句 (23節a) はルカの編集句と考えられる<sup>7</sup>。

ルカ9:28-36はマルコ9:2-8及びマタイ17:1-8に並行しており、ここでもルカはマルコを主要な資料として用いている。その一方で、ルカとマタイの間には少なからず弱小一致が確認されるが<sup>8</sup>、それらもマルコの改訂版に由来すると考えられる。ルカとマルコの間にはその他にも様々な相違点が存在しており、イエスの

5 この箇所に記載されているペトロのキリスト告白やイエスの沈黙命令、受難予告等の史実性については盛んに議論されてきたが明らかではない。イエスの生前に弟子によるキリスト告白がなされていた可能性は完全には否定できないが、一方で、沈黙命令と受難予告、ペトロの拒絶とイエスの叱責(マコ6:30-33)は後代になって(マルコによって?)構成されたのであろう。

6 R. プルトマン『共観福音書伝承史I』(プルトマン著作集1)加山宏路訳、新教出版社、1983年、142-144頁。

7 さらにルカは、マルコ8:36の τὴν ψυχὴν αὐτοῦ ἐαυτὸν で置き換えて ἀπόλλυμι を付加し(25節)、自分の命を買い戻す代価に関する言葉(マコ8:37全体)を省略している。

8 顔(τὸ πρόσωπον)への言及(29節b/マタ17:2)、マルコ9:3bの欠如、καὶ ἰδοὺ(30節a/マタ17:3)、モーセ→エリヤの順序(30節b/マタ17:3)、雲が出現する際の独立属格による描写(34節a: ταῦτα δὲ αὐτοῦ λέγοντος …/マタ17:5: ἔτι αὐτοῦ λαλοῦντος …)、λέγουσα(35節a/マタ17:5)等。



旅立ちに関するエリヤとモーセとの対話及び弟子たちの描写（31-33節 a）の他、祈りに関する記述（28f節）や34節 b, 36節 b等はルカの挿入句と考えられる。また、マルコ9:9-13の下山の描写及び弟子への沈黙命令とそれに続く死者の復活とエリヤの到来に関する対話部分はルカには見られないが、ルカがマルコ9:9を知っていたことはルカ9:36-37からも明らかであり、おそらくルカは、預言者の魅りの表象を重視せず、洗礼者ヨハネをエリヤの再来とは見なさなかったためにこの箇所を省略したのであろう。この他、28節の「8日」（マコ：「6日」）、33節の ἐπιστάτα（先生）との呼びかけ（マコ：ῥαββί）、35節の「選ばれた者」（ὁ ἐκλελεγμένος）、さらには種々のルカ的表現<sup>9</sup>はルカの編集句であろう<sup>10</sup>。以上のことから、ルカはマルコを唯一の資料として用い、自らの福音書の他の箇所と関連づけながら大幅に編集の手を加えつつ、このテキストを構成したと考えられる<sup>11</sup>。

## 2.3. テキストの内容

### 2.3.1. ペトロのキリスト告白と第一回受難予告（9:18-22）

この箇所をイエス一行がフィリポ・カイザリア地方に赴く途上の出来事として語るマルコの導入句（マコ9:27a）とは異なり、ルカはこの段落を、イエスが「一人で」祈り、弟子たちも共にいたという状況設定のもとに書き始めている<sup>12</sup>。18節b以降は、マルコと同様、イエスとペトロら弟子たちとの対話によって構成されている。祈りを終えたイエスは弟子たちに自らの本質に関する群衆の見解を尋ねるが、この問いは後続のペトロのキリスト告白を準備し、ひいては受難する人

9 ἐγένετο δέ（28節）及びκαὶ ἐγένετο（29,33,35節）、ἐν τῷ +不定詞（29,33,34,36節）、人間の意の ἀνὴρ（30節）、δόξα（31,32節）、σὺν αὐτῷ 及び βαρέω（32節）、εἶπεν ... πρὸς +対格（33節）、καὶ αὐτοί（36節）等。

10 J. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I-IX* (AB 28), New York 1983, p. 792; H. Schürmann *Das Lukasevangelium*, I (HThK III/1), Freiburg/ Basel/ Wien 1990, p. 559 参照。

11 なお、ルカによって付加された幾つかのモチーフ（夜間における山上でのイエスの祈り、エルサレムにおけるイエスの死の暗示、眠り込む弟子たち）は、この変貌物語を後出のゲッセマネ（オリブ山）の場面（22:39f）と関連づけている。

12 ルカのイエスは、その生涯の重要な局面において頻繁に祈っており、その際、弟子たちもしばしば同行している（ルカ9:28; 11:1; 22:39f 参照）。

の子に関するイエスの予告へと導いていく。ここで弟子たちは群衆がイエスを（再来の）ヨハネ、エリヤあるいは昔の預言者と見なしていることをイエスに伝える（19節）<sup>13</sup>。この「復活」への言及は、後続の人の子の復活に関する記述を準備しているが、ルカは、後続のイエスの復活に関する箇所では、マルコの「復活する」（ἀναστήναι = ἀνίστημι の不定法アオリスト形）に代えて「甦らされる」（ἐγερθῆναι = ἐγείρω の不定法アオリスト形受動態）を用いることにより（22節//マコ8:31）、ここでの預言者の復活とは区別している。

イエスは自らに関するそのような群衆の見解について直接言及せず、今度は「あなたたち自身」（ὁμοίως）と強調しつつ弟子たちの見解を尋ねる（20節）。ここでは群衆と弟子たちとが明らかに区別されており、イエスを単なる預言者の再来と見なす群衆の見解が批判的に捉えられている<sup>14</sup>。そこでペトロが弟子を代表して答えるが、マルコ8:29では「あなたはキリストです」（σύ εἶ ὁ χριστός）と述べられているのに対し、ルカにおいては簡潔に「神のキリスト」（τὸν χριστὸν τοῦ θεοῦ）とのみ記されている（cf. マタ16:16：「あなたはキリスト、生ける神の子です」）。イエスをキリストとする理解については、すでに誕生物語における天使の言葉（2:11：χριστὸς κύριος [主なるキリスト]）や聖霊のシメオンへの告知（2:26：χριστὸς κυρίου [主のキリスト]）において言明されているが（さらに4:41；23:35；使2:36；3:18；4:26参照）、ここで初めてそれが弟子によって表明されることになる。ここでルカは属格の「神の」（τοῦ θεοῦ）を付加することにより、キリストの神への帰属性、すなわち両者の親密な関係を強調しているが（使3:18；4:26；黙11:15；12:10）、ルカはこの近さを、神によって受難から守られるという意味ではなく、むしろ、神との結びつきにおいて受難の道を歩むという意味で理解している。また、十字架につけて殺されたイエスを神は主とし、キリストとしたという使徒行伝2:36の記述からも、この「神のキリスト」という表現には復活信仰の投影があ

13 三つ目の見解に関して、マルコやマタイでは単に「預言者の一人」と記されているのに対し（マコ8:28//マタ16:14）、ルカは「復活した」（<ἀνίστημι>）という表現を加えることにより、ヘロデのエピソードにおける証言（9:8）と逐語的に一致させている。

14 おそらくそれゆえに、弟子たちが5000人の供食の出来事を理解できずに心が鈍くなっていたとするマルコ6:52の記述はここでは省かれている。

ると考えられる<sup>15</sup>。

そこでイエスは、弟子たちを厳しく戒め、このことを誰にも話さないように命じる(21節)。マルコにおいては「彼(イエス)について」(περὶ αὐτοῦ) 話すことが禁じられているのに対し、ルカにおいては沈黙命令の対象は「このこと」(τοῦτο)、すなわち「神のキリスト」という称号に特化されており、この点はマタイも同様である。また、ルカの文脈においては、この沈黙命令は次節の受難予告と一文で表現されていることから、後続の受難予告と直接関連づけられており、それをも含意していると考えられる。すなわち、キリストという称号の本質は受難と緊密に関わっており、将来においてイエスが経験する受難、さらには復活を通してキリストとしてのイエスの本質が明らかにされるのであり(24:26参照)、その前提なくしてキリストについて語られるべきではないというのである。その意味では、マルコにおける「メシアの秘密」に代わって、ルカにおいては「メシアの受難の秘密」が問題になっている<sup>16</sup>。いずれにしても、イエスはペトロのキリスト告白自体を否定していないが、この点は受難予告に対するペトロの反論と彼への叱責(マコ8:32b-33)を欠くルカにおいてはより明確に示されている。

沈黙命令に続いてイエスは、人の子としての自らの受難と復活について予告する(22節)。すなわち、人の子イエスは多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者から排斥され、殺され、三日目に甦らされる(ルカ13:32; 18:33; 24:7, 21, 46; 使10:40; I コリ15:4参照)。自らの受難・復活を予告するイエスのこの「人の子」発言は(6:5,22; 7:34参照)古い層に遡ると想定される。

ここでは人の子の運命が四つの不定詞を用いて表現されているが、最初の「多くの苦しみを受け」(πολλά παθεῖν)という表現は(ルカ17:25; 24:26,46参照)、第二、第三受難予告には見られず、その具体的内容は明らかではないが、おそらくイエスの受難に関わる全般的な意味で用いられているのであろう。これに続く「排斥

15 三好迪「ルカによる福音書」高橋虔他監修『新共同訳 新約聖書註解I』、1991年、314頁。なお、マタイにおいてはこのあとペトロに対する幸いの言葉がイエスから述べられ、さらにペトロ(=岩)の上に教会が建てられ、彼に天国の鍵が授けられるという旨のイエスの発言が続いている(マタ16:17-19)。

16 W. Grundmann, *Das Evangelium nach Lukas* (ThHK 3), Berlin 1961, p. 189.

され」(ἀποδοκιμασθῆναι) という語も第二、第三受難予告には見られないが、この語がルカ17:25及び20:17とその並行箇所(詩編118:22参照)において用いられていることは、それが受難伝承の一要素であったことを示唆している<sup>17</sup>。なお、マルコにおいてはユダヤ人指導者層の各集団に定冠詞が付せられているのに対し、マタイと同様ルカは、冒頭の長老にのみ定冠詞を付すことによりこれらを一集団として捉えている。

イエスの受難は、マルコと同様にルカにおいても、ユダヤ人指導者層から排斥された後に「殺され」(ἀποκταίνθῆναι) という表現に集約されている。マタイと同様ルカにおいても、マルコの「三日後に復活する」(μετὰ τρεῖς ἡμέρας ἀναστήναι) に対して「三日目に甦らされる」(τῇ τρίτῃ ἡμέρᾳ ἐγερθῆναι) と、直前の動詞と同様、受動形で表現されているが(24:34参照)、それによって、これらのユダヤ人指導者層の行動が神の行為の対極に位置づけられ、他ならぬ神ご自身がイエスを甦らせるという点が強調されている<sup>18</sup>。また、キリストに対する神の一連の行為の必然性が強調されている(δεῖ) ルカにおいては、「神のキリスト」としてのイエスのメシア性は復活の栄光へと導く受難の道の観点において理解されている。

### 2.3.2. 信従の道 (9:23-27)

弟子たちに自らの受難の運命を予告した直後にイエスは信従の覚悟について語り始め(23節)、イエスはここで信従希望者に対して「自分自身を否み、日々自分の十字架を背負い、私に従って来なさい」と要求している(ルカ14:27参照)。ここで用いられている「自分自身を否む」、「自分の十字架を背負う」、「従って来る」という三つの表現は相互に関連しており、最初の二つの表現(命令法アオリスト形)は最後の一般的表現(命令法現在形)の具体的内容を示している。

17 R. A. カルペパー『ルカ福音書』(NIB新約聖書註解4) 太田修司訳、ATD・NTD聖書註解刊行会、2002年、254頁。一方で第二、第三受難予告に含まれる「引き渡される」(παραδίδωμι) という語はここには欠けている。

18 「三日後に」(マコ8:31) から「三日目に」への修正は(ルカ13:32; 18:33; 24:7,21,46参照)、最初期のキリスト教会のギリシア語伝承においてはこの表現が頻繁に用いられていた(1コリ15:4参照)ためであろう。

23節の原則的要求のあとにそれを根拠づける三つの言葉が続いているが、最初の言葉（24節）は対比的に構成された二つの部分から成り、命の救出と喪失について、その意図するところとは正反対の結果がもたらされるという逆説的真理が示されている。すなわち、自分の命を救おうとする試みはそれを失う結果に帰し、その一方で（イエスゆえの）命の喪失は命の救出をもたらすというのである（ルカ17:33; ヨハ12:25参照）。続く第二の言葉（25節）は「たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失ったり損なったりしては、何の益になろうか」という修辭的な問いによって前節の言葉を根拠づけているが、ルカはここで前出の ἀπόλλυμι（失う）を加えることにより、ἀπόλλυμι と σώζω（救う）が対置されている直前の24節と緊密に接合させている。この言葉は内容的に24節前半部と密接に関連しており、ルカはマルコの ψυχή（命）を ἑαυτόν（自身）に置き換えることによりその内容をより先鋭化している。すなわち、肉体の命を救っても、それが真の命の喪失に導くなら何の益にもならないように、全世界を獲得したとしても、それが自分自身の喪失をもたらすのであれば無意味だというのである。第三の言葉（26節）も第二の言葉と同様、23節bの原則的要求の内容を根拠づけており、さらに、24節における自分の命を救おうとする試みがイエスとその言葉を恥じることと関連づけられている。この言葉も元来は迫害状況が前提とされており、迫害下において自分の肉体の命を救おうとしてイエスを拒絶し、イエスとその言葉を恥じる者は、人の子もその再臨に際しては、最後の審判においてその者を恥じることになり、裁かれるというのである。

最後の27節の言葉は先行する23-26節からは内容的に独立しているが、それでもマルコの移行句（καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς）を欠くルカにおいては（マタイも同様）、両者は形式的に関連づけられている。この言葉は、「ここに立っている人々」のある者は、神の国を見るまで死を味わわないと語っている（ヨハ3:3参照）<sup>19</sup>。

<sup>19</sup> 神の国の間近な到来について語るこの言葉は、終末遅延を前提とするルカの終末理解とは緊張関係にあるが、ルカは間近な終末待望を示唆するマルコの記述を受け継ぎつつも、「力にあふれて現れる」という表現を省略することにより、将来の特定の時期における神の国の到来について語ろうとするマルコの理解を後退させ、むしろイエスの働き（現存）もしくは復活との関連における神の国の到来を示唆している（ルカ10:9,11; 11:20; 17:21参照）。すなわち、信従

### 2.3.3. イエスの変貌 (9:28-36)

「これらの話をしてから」<sup>20</sup>8日ほど後に<sup>21</sup>、イエスは三人の弟子を連れて山に登るが、同様にモーセも三人の仲間（アロン、ナダブ、アビフ）を連れて山に登っている（出24:1, 9）。「山」（τὸ ὄρος）は啓示の場を意味し<sup>22</sup>、この場面設定はイエスと神との出会いを準備している。ルカのみが「祈るために」という山に登ったと記しているが、ペトロの信仰告白の場面（9:18）と同様、ここでもイエスの祈りに言及されている<sup>23</sup>。また、前述したように、ルカのイエスはしばしば重要な局面で祈っているが、その意味でもこの描写は重要な出来事が起こることを予感させる。

こうしてイエスが祈っている間に変貌の出来事が起こり、彼の顔は変化し、彼の服は真っ白に輝いた（29節；エゼ1:4,7参照）。イエスの姿が変わった（μετεμορφώθη）と記すマルコ9:2に対し、ルカは顔の変化についてのみ触れているが、それによって異邦人読者が異教の神話的変貌と混同するのを避けようとしたのかもしれない。この顔の様子の変化は、イエスの本質の変化を示しているのでも神の顕現を表しているのでもなく、イエスと神との関係を表現しているのであろう<sup>24</sup>。また、ルカ

---

の条件を満たしてイエスにつき従って来た一部の信従者たちは近い将来に神の国の救いを質的に経験できるのであり、そのようにルカは、神の国の実質的な意味での到来は未来のことであるとしても、イエスの人格においてすでに現在化していると見なしているのであろう（H. コンツェルマン、『時の中心—ルカ神学の研究』田川建三訳、新教出版社、1965年、176f頁；F. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas*, I (EKK III /1), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1989, p. 486)。

20 「これらの話をしてから」（μετὰ τοὺς λόγους τούτους）のλόγοςは「出来事」とも解しうが、ここでは9:18以降の一連のイエスの言葉（話）を指しているのであろう。

21 マルコの「6日」（マタイも同様）に対してルカは「8日ほど」と記している（ヨハ20:26参照）。一部の研究者はマルコがユダヤ式の数え方を用いたのに対してルカはローマの暦を採用したためと想定しているが<sup>25</sup>（Grundmann, op. cit., p. 192）、「6日後」は数え方によっては「8日目」（一週間後）とも解しうることを勘案すればそのような想定は不要かもしれない（H. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 346 n. 16)。

22 伝統的にこの山は下ガリラヤ南隅のナザレ近くのタボル山（詩89:13；ホセ5:1f）と同定されてきた。

23 ルカは他の箇所でもイエスが夜間に祈る姿を描いており（6:12；22:39以下）、32節には弟子たちが眠り込む様子が描かれ、直後の段落は「翌日」という表現で始まっていることから（9:37）、この変貌は夜間の出来事として描かれている。

24 Bovon, op. cit., p. 495。

においては「彼ら（＝弟子たち）の目の前で」（マコ9:2）という表現が欠けており、弟子たちがイエスの変貌の出来事の証人であったかどうかは曖昧にされているが、この点は弟子たちが眠り込んでいたとする後続の記述（32節）とも符合している。白色は黙示的な色であり（黙2:17; 6:2; 20:11）、天使の衣服の色であると共に（24:4; 使1:10; 黙3:4f; エチ・エノク71:1）神の色である（ダニ7:9; エチ・エノク14:20）。

そこにイエスと語り合う二人の人物（24:4; 使1:10参照）——モーセとエリヤ——が現われる（30節）。ここで彼ら二人が言及されている理由は明らかではなく、聖書には両者の組み合わせはここ以外に見られないが（黙11:6のみ参照）、おそらく彼らは聖書全体を意味する「律法と預言者」を象徴的に示しており（ルカ16:29-31; 24:27,44; 使26:22f参照）、さらには旧約の重要人物である彼らを引き合いに出すことによって、イエスが彼らに優る存在であることを示そうとしているのであろう。事実、聖書全体はモーセ（＝律法）において始まり、エリヤに関する記述（マラ3:23f）で結ばれている。なお、ヨセフスの『ユダヤ古代誌』4:326には、モーセの上に一団の雲が降りて来て峡谷の中に姿を消したと記され、また列王記下2:11にはエリヤが嵐の中を天に上って行ったと記されており、両者とも死を経験しなかった人物として描かれている。

ここでルカは、マルコの記述を越えてこの二人の様子について書き加えている（31節）。すなわち、二人は「栄光のうちに現われ」、エルサレムで成就するイエスの「旅立ち」（*ἔξοδος*）について語り合っていたという。「栄光」（*δόξα*）への言及（31,32節）は彼らが天的存在であることを示し、*ἔξοδος* という語は七十人訳聖書では常にモーセによる出エジプトの出来事を指しているが（ヘブ11:22参照）、死の意味でも用いられている（Ⅱペト1:15; 知恵3:2; 7:6参照）。その意味でも、ここでの*ἔξοδος* は第一義的にイエスの死（13:33参照）の意味で解しうるが、「栄光」への言及からもそれに留まらず、イエスが十字架の死を越えて復活し、天へと向かう旅立ち（ルカ24:26, 46参照）をも含意しており、さらには、そこに至る9:51に始まる、神の救いの計画におけるイエスのエルサレムへの道を暗示している。ルカはさらに弟子たちの様子についても書き加えており（32節）、ペトロをはじめとする弟子たちは当初は眠り込んでいたが、やがて目を覚まして、イエスの栄

光と彼のそばの二人の人物を見た。その意味でも、マルコの場合とは異なり、ルカにおける弟子たちはここまでの出来事を目撃しておらず、イエスの旅立ちをめぐる三人の天的存在の対話も聞いておらず、ここで初めてイエスの栄光と二人の人物を目にすることになる<sup>25</sup>。

またルカのみが、前節におけるモーセとエリヤを包む栄光に続いてイエス自身の栄光について触れている。この描写は明らかに復活あるいは再臨と関わっており（ルカ9:26; 21:27; 24:26参照）、ルカはここで、イエスの旅立ちが受難の死に終わるのではなく復活に至ることを示唆している。三人の弟子たちは、9:27で言及されていた意味において神の国を見たわけではないが、それでもイエスの栄光を見たという意味で彼らは神の国の秘儀に触れたことが示唆されている<sup>26</sup>。

さらに、ルカのみが二人の人物が立ち去る状況に言及しているが、まさに彼らがイエスから離れて行こうとしたとき、ペトロはイエスに「先生」（ἐπιστάτα [マコ：ῥαββί / マタ：κύριε]）と呼びかけ（5:5,8; 8:24,45,49; 17:3参照）、自分たちがここにいるのは素晴らしいことだと前置きした上で、イエス、モーセ、エリヤ、それぞれのために幕屋を建てることを提案する（33節）<sup>27</sup>。

このペトロの提案の真意は明らかではないが、二人が「彼から離れて行く際」というルカに特有の移行句は、ペトロがこれら三人の天的存在を地上に留めようとした可能性を示唆している。ペトロはまた、ここでイエスを他の二人と同等に扱っているが、いずれにせよ、彼の提案はイエスの「旅立ち」に言及する31節の内容と明らかに対立しており、他の二人を凌駕する存在であり、（すでに予告された）死から復活に至るエルサレムへの道をこれから進んでいくべきイエスの本

25 一部の研究者は、このとき弟子たちは完全に眠り込んでいたわけではなく、眠気で意識が朦朧とした状態であったと主張しているが（Bovon, op. cit., pp. 497f; J. B. Green, *The Gospel of Luke* (NICNT), Cambridge 1997, p.383）、βεβαρημένοι ὑπνω (眠りで重くなっていた) という表現は（マタ26:43参照）、「眠気をもよおした」ではなく「深く眠り込んだ」の意である（田川建三訳『新約聖書 ルカ福音書』、作品社、2011年、261f頁参照）。

26 Fitzmyer, op. cit., p. 795; K. Löning, *Das Geschichtswerk des Lukas*, Bd. I: Israels Hoffnung und Gottes Geheimnisse, Stuttgart/ Berlin/ Köln 1997, p. 252.

27 ここでの幕屋の意味については、①荒れ野における幕屋、②仮庵祭における仮庵、③メシア（キリスト）の終末論的幕屋、④来たるべき世界における永遠の住まい等、様々な可能性があり、確定は難しい。



質をペトロが十分には理解していなかったことを示している。彼はまた、このような天的存在は人間の手によって造られたものに居住しないことも理解していなかった（使7:48参照）。実際、ペトロ自身も「自分が何を言っているのか、分からなかった」のであり、マルコがこのようなペトロの提案を彼の戸惑いと恐れに帰しているのに対して（マコ9:6）、ルカはむしろその無理解が居眠りに起因するように印象づけようとしている。事実このようなペトロの提案は、彼がイエスの旅立ちに関するモーセとエリヤの対話（31節）を聞いていなかったことを裏付けている。

このペトロの提案は、雲が現われて人々を覆うという直後の現象によって遮られる（34節）。雲は旧約において神の現存と栄光を象徴する存在として捉えられており（出16:10; 19:9; 24:15-18; 33:9-11; 40:34f他参照）、この箇所はまた、雲が人々を覆い、神が雲の中から語りかけるシナイ山の出来事（出19:16-20）を思い起こさせる（さらに3:22参照）<sup>28</sup>。さて、そのようにして雲に覆われた三人の天的存在は雲の中へと入って行ったとき、弟子たちは恐れたと記されているが、マルコにおいては弟子たちは雲の出現前のペトロの発言の際にはすでに恐れており（マコ9:6）、マタイにおいては彼らは雲の中からの声を聞いて恐れたと記されている（マタイ17:6）。

前節の視覚的現象に続いて聴覚的現象が起こり、雲の中から声が聞こえてくる

28 もっとも、このとき雲が覆った対象(αὐτοῦς) は明らかではない。36節の「イエスだけが[そこに]いることがわかった」という記述がその直前までモーセとエリヤがその場に存在していたことを示しているなら、イエス、モーセ、エリヤの三人の天的存在が含まれていることになる(Fitzmyer, op. cit., p. 1802; なおE. Schweizer *Das Evangelium nach Lukas* (NTD 3), Göttingen 1986, p. 105はモーセとエリヤのみを想定)。一方の弟子たちについては、確かに直後の「彼らが雲の中に入って行ったとき、彼らは恐れた」という表現は、「恐れた」後者の「彼ら」のみならず、「雲の中に入って行った」前者の「彼ら」も弟子たちを指しているような印象を与えるが(H. Schürmann, op. cit., p. 561; M. Wolter, *Das Lukasevangelium* (HNT 5), Tübingen 2008, p. 354; 一方でGreen, op. cit., p. 384は弟子たちのみに限定)、この描写は他の人々が雲に覆われていくのを見て弟子たちは驚いたと解することも十分に可能である(I. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1995, p. 387)。さらに「雲の中から」聞こえた声を弟子たちが(雲の外で)聞いたと想定される点(35節)、ルカはマルコ9:8とは異なり、イエスが「彼ら(=弟子たち)と共に」いたとは記しておらず、イエスと弟子たちを分離して捉えている点からも、弟子たちは雲の中ではなく外部にいたと見なすべきであろう。

(35節; 出24:16参照)。この神の返答は、このようなペトロの提案を拒否し、イエスが神の子であり(詩2:7参照)、選ばれた者であることを表明すると共に彼に聞き従うように要請する。この神の語りかけは、イエスの洗礼直後の神の言葉を思い起こさせるが(3:22)、その際の神の言葉は直接イエスに向けられていたのに対し、ここでは三人称で語られ、弟子たちに向けられている。ルカはまた、マルコの「愛する者」(ὁ ἀγαπητός)に代えて「選ばれた者」(ὁ ἐκλεκτός)を用いている(新約ではこのみ)。この表現は七十人訳聖書ではしばしば神に選ばれたイスラエルの民の意味で用いられるが、神の僕を「私が選び、喜び迎える者」と表現するイザヤ42:1とも共鳴し、ルカ23:35の用例は受難への道との関連を想定させる<sup>29</sup>。また、これに続く「これに聞け」(αὐτοῦ ἀκούετε)という指示は、将来的に現われるモーセのような預言者に聞き従うことを命じる申命記18:15に対応しているが(使3:22も参照)、ここで聞くように指示されているのは、何より直前のイエスの受難予告と弟子たちの信従に関するイエスの言葉(9:22-27)であったと考えられる。いずれにせよ、ここではモーセとエリヤは背景に退き、イエス一人に焦点が当てられている。

天からの啓示の言葉と要求によって、この山上での出来事は唐突に閉じられ(36節)、その声が聞こえているときに雲も天的存在も姿を消し、イエスだけがそこにいることが明らかになる。これにより、天の声が明らかにイエスに関わっており、イエスのみが天と地とを仲介する存在であり、まさにモーセやエリヤを凌駕し、「律法と預言者」に代わって新しいイスラエルを現出する存在であることが示される。マルコにおいては、人の子が復活するまでは誰にも話さないように弟子たちに命じられているのに対し(マコ9:9)、ルカにおいては沈黙命令は発せられず、三人の弟子たちはこの出来事について「その当時は」、すなわちイエスの旅立ちの成就である復活(昇天)までは(自主的に)沈黙を守るが、この沈黙はある意味で彼らの無理解を示している<sup>30</sup>。

<sup>29</sup> Marshall, op. cit., p. 388.

<sup>30</sup> Löning, op. cit., pp. 253f.

### 3. 神の子イエスの本質

ルカ4:14以降のイエスのガリラヤ宣教の記述において、繰り返しイエスの本質をめぐる問いに言及されていながらも、ルカ9:20のペトロの告白において、初めてこの問いに対する真っ当な答えが提示されることになる。このペトロのキリスト告白は、マルコにおいては物語における決定的転換点を示すものとして、マタイにおいては将来の教会建設の言葉へと繋がるのものとして理解されているが、ルカの文脈においては、後続の沈黙命令及びイエスの受難・復活予告と緊密に結びつくことにより、イエスを受難・復活する神のキリストとして理解されている。もっとも、このキリスト告白には弟子たちにおける信従が対応しており(9:23-27)、ルカの理解によると、それなくしてはこの告白は理解されないのである。

これに続くイエスの変貌の段落は、このイエスの本質をめぐる問いに対して、改めて一つの答えを提示している。この段落は、イエスの変貌、天的存在の出現、雲の中からの神の声という三つの要素から構成されているが、最初のイエスの変貌の記述と、それに続く二人の天的存在によるイエスの「旅立ち」への言及を通して、エルサレムへの旅の箇所(9:51以下)を先取りすると共に、神の子イエスの将来の受難、復活、昇天が予告されている。さらに最後の神自身の表明を通して、イエスが「律法と預言者」を象徴するモーセやエリヤに取って代わり、それを凌駕する神の子であることが最終的に認証され、人々が聞き従うべき唯一の存在であることが強調されている。神の子としてのイエスの存在は、実際には受難、復活を経て明らかにされることになるが、ここにおいてすでに暗示されている

### 結び

ルカ9:20におけるペトロのキリスト告白は、神の子イエスの本質が弟子によって初めて証言されたという意味で極めて重要な意味をもっている。そして、イエスが「キリスト」であるということは、その直後に受難予告と続いていることから明らかのように、イエスの受難、復活と不可分に結びついており、さらには、

自らも十字架を背負い、イエスに信従することによって、そのことが明らかになることが示されている。このようなイエスの本質は、イエスを「私の子、選ばれた者」と証言する天の声（9:35）によって最終的に確認されるが、その意味でも、まさに神の子イエスは、神から使命をもって派遣された存在として理解されているのである。